

歴史を語る建物たち

第12回

今日、20世紀型の開発優先社会は終息を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

酒田港座（酒田市）



酒田市の中心通りから脇道に入り、飲食店やスナックなどが集まる界隈を歩くと、「映像とサウンドのきらめき」と書かれたビルがある。

平成14年まで常設映画館だった「港座」である。

造り酒屋の若旦那が経営者に

明治20年、興行師の長崎新吉がこの場所に芝居小屋「港座」を建てた。最大で1,000人以上を収容でき、当時、東北一の劇場といわれた港座では芝居や歌舞伎などが公演され、大正期になると映画も上映された。

港座の運営には、清酒「初孫」の醸造元「金久酒造」（現在の東北銘醸株式会社）も関わっていたが、2代目佐藤久吉が家業を継ぐと、程なくして久吉が港座の経営者になった。久吉は、酒田市議会議長や酒田商工会議所会頭を務めるなど、地元の名士としても活躍した。また、戦時中には港座での舞台興行が縁で親交のあった座長の息子の疎開も引き受けた。後に日本を代表する俳優となる、若山富三郎・勝新太郎兄弟である。

港座の建物は昭和29年に焼失したが、久吉は、すぐ同じ場所に映画館を建造した。その後、増改築を経て現在の形となるが、その際に参考としたのが、当時、久吉の長男・久一が経営していた洋画専門の映画館「グリーン・ハウス」（昭和51年焼失）であったといわれる。久一は、長男でありながら家業を継がず（次男が継承）、グリーン・ハウスのほか、酒田市内に「レストラン櫛」や「ル・ポットフー」といったフランス料理店を開き、支配人を務めた。

東京との同時上映を実現

再建された港座には3つのスクリーンがあり、それぞれ大劇場（180席）、中劇場（80席）、小劇場（30席）と名付けられた。映画『おくりびと』の滝田洋二郎監督は、これを「昭和のシネコン」と評した。

シネコン（シネマコンプレックス）とは、同一の施設に複数のスクリーンがある映画館のことで、作品の話題性や観客の入り具合に応じて、作品を上映するス

クリーンな館内で柔軟に変えられる利点がある。平成20年末で、映画館全体の約45%、スクリーン数では全体の約80%を占めるが（社団法人日本映画製作者連盟調べ）、港座が再建された当時は全国的にも珍しいスタイルであった。

もう一つ、港座の自慢は、東京で上映される作品を同時公開することであった。かつて映画作品は、東京などの大都市で公開された後、地方の映画館で公開されるのが一般的であり、地方の映画館で東京と同時公開を行うことは極めて異例であった。これもひとえに久吉および、後に久吉から経営を任された三男・貞夫の経営手腕によるものであり、酒田市民にとっても自慢の種であった。

しかし、映画産業の斜陽化と広大な駐車場を持つ郊外型シネコンの台頭によって、“まちなか”の映画館は次第に姿を消し、港座も平成14年、芝居小屋から115年の歴史を経て幕を閉じた。

映画による「映画」のような復活劇

港座が再び幕を開いたのは全くの偶然であった。

映画『おくりびと』（平成20年公開）の制作スタッフは、発足間もない「酒田ロケーションボックス」に現地サポートを申し出た。ロケーションボックスではロケハン（屋外のロケ地を探すこと）の手伝いも行ったが、紹介されて港座を訪れた滝田監督は、一目見てここでロケを行うことを決めた。実は、滝田監督が助監督時代に制作した作品が港座で公開されたことがあり、その建物がまだ残っていたことに監督は大きな感銘を受けたのである。

こうして、閉館後は廃屋同然だった港座で、本木雅弘演じる新米納棺師が、納棺解説DVD制作のために遺体役を演じさせられるシーンが撮影された。

なお、『おくりびと』の記録的なロングヒットと、米アカデミー賞外国語映画賞受賞など数々の受賞歴については今さら語るまでもないだろう。そして、『おくりびと』をきっかけに、地元の映画好きらが集まって「台町と映画を愉（たの）しむ会」を設立し、平成21年



大劇場のスクリーン。前方の舞台上で、映画『おくりびと』の「納棺解説DVD制作」のシーンが撮られた（著者撮影）

「港座復活祭」のチラシ。映画館を舞台にしたイタリア映画『ニュー・シネマ・パラダイス』が上映作品に名を連ねているのが興味深い（関浩一氏提供）。



6月、「復活映画祭」と称した上映会が催された。実に7年ぶりのスクリーン復活である。

ちなみに、復活映画祭の話聞いた滝田監督は、「映画がきっかけになって映画館が復活するなんて、映画みたいな話だ」と語ったという。

地元にあるものの“すごさ”

復活映画祭は昨年6月から毎月開催され、12月にもクリスマス（25日）と大晦日（31日）に上映会が開催された。なお、上映会には港座周辺の飲食店なども協力し、半券を見せると「ドリンク1杯無料」「カラオケ3曲無料」などさまざまなサービスが受けられる。協力店はだんだん増えているそうだ。

“まちなか”で映画を観ることの意味について、酒田ロケーションボックスで港座を担当する関浩一氏は、「街を歩きながら映画館に向かうところから、すでに映画は始まっている。また、街を歩きながら帰途につく間も映画は続いている。つまり、映画館は“街の一部”であり、街そのものが、映画を観る楽しみや余韻を増幅させてくれる。さらに、映画観賞の前後に近くで食事などをすれば街の活性化につながる」と、郊外型シネコンとの違いを力説する。

ところで、関氏には「いつか港座で映画祭を開催したい」という夢がある。そこには、「アマチュアの趣味でも、5分程度のショートムービーでもいい。地元出身者が“フィルムを撮った”という経験を生かして、将来プロの映画監督となり、自分の作品を港座で公開する。例えば、放流した鮭の稚魚が大きくなって戻ってくるイメージ」という、人材育成に懸ける思いが込められている。

港座は、上映会のない日でも一般公開され、観光バスの団体ツアーが訪れることもある。最後に関氏は、「おくりびと効果によって、地元の人が地元にあるものの“すごさ”を感じたのではないのでしょうか」と熱っぽく語った。

（庄銀総合研究所 研究員・山口泰史）